

イエスと出会う人生

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 2章22節～32節

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。メオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」

[序] 一年の終わりに

今日のこの礼拝のひと時を、私たち一人ひとりに与えられている一年間の神様の恵みを振り返りながら持てますことを感謝しています。一年間はアツという間に過ぎるほど早く感じますがけれども、やはり色々な事が私たちそれぞれの歩みの中で あったことと思います。

私自身のことを申して恐縮ですが、私は、一年前にはこの川越教会にはおりませんでした。クリスマス礼拝も昨年は大泉教会で捧げておりました。この4月からはこの川越教会の一員とされて、毎週皆さんと顔と顔を合わせて礼拝を捧げる生活へと神様が“変えて”下さいました。妻も川越教会の仲間に加えて頂きました。

娘も結婚したり、息子が就職したり、年老いた両親の入院・退院、高齢者住宅への入居など、なかなか濃厚な一年でしたけれども、そのたびに、ああ、本当に祈れることは幸いなことだな、有難いことだなと思わされています。そして、皆様のお祈りを心から感謝しております。ありがとうございます。

[1] シメオンの喜び—イエス様との出会い

今日の聖書の箇所である、いわゆる「シメオンの賛歌」は、年末の礼拝に相応しい箇所だと思います。ここで登場するシメオンは、幼な子イエスを胸に抱き「私は今日この目で救いを見た」と語り、また、「主よ、今こそあなたはこの僕を安らかに去らせてくださいます」と言っています。

これはすごい言葉ではないでしょうか。まだ、幼な子(赤子)のイエス様です。腕の中にすっぽりと抱えられてしまう小さな、小さな存在です。けれども、シメオンは、もうこれで良いのだ、私が生きてきた目的はこれで満たされた、私はもう安らかにこの世を去って行くことが出来る、と言っているのです。「安らかに」というのは、「平和のうちに」と言う意味です。ちょうど、あのクリスマスの夜に天使たちが「地には平和、みこころに適う人にあれ」と大合唱をしました、あの「平和」と同じ言葉です。おそらく年を重ねていた老人であったシメオンは、本当に神様が下さる確かな平和・平安のうちにこの言葉を発したのではないのでしょうか？

シメオンは特別な人でしょうか？確かに聖書には「この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた」とありますから、特別に神様から選ばれた人とも言えると思いますけれども、聖書でシメオンの名前が出てくるのはこの箇所だけです。特別に何か活躍した人物ではないようです。祭司であったのではと言う学者もおりますが、どうもはっきりしません。

「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた」(25節)と簡潔に紹介しているように、シメオンは、私たちと変わらない、特別な肩書きも持っていない、言ってみれば、この世界の片隅のその置かれた所で、喜びと悲しみを繰り返しながら生きている私たちと同じ人間だと言って良いのではないのでしょうか？

そのシメオンが、「もう自分は死んでもよいのだ。なぜならば、私はこの地上でイエス様と出会ったからだ」と言っている。私は、これを読んで、ああ、信仰者とはみんなそうなのだな！と、思わされました。クリスマスの主をお迎えするという事は、実は、厳かなことです。自分の「死」を、ある意味、喜んで受け入れることが出来るようになることと言っていると思うのです。

[2] 全ての人のための救い

しかも、私は不思議に思うのですが、シメオンは、ただ自分のためにイエス様との出会いを喜んでいただけではありませんでした。私だったら自分の心の平安、罪の赦し、永遠に生命の約束ということを知った時、ああ、本当に良かった！と神様に感謝を捧げますけれども、けれどもシメオンは違いました。ここでのシメオンの賛美は、個人主義的と言うか、自己充足的な賛美ではありませんでした。

「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(2:31-32節)とシメオンはイエス様を腕に抱きながら言いました。「万民」とは文字通り「全ての人」のことです。年末になるとベートーヴェンの「第九」がよく演奏されますけれども、第四楽章で「全ての人よ、互いに抱き合おう」と歌うのと同じ「全ての人々」です。例外も、排除される人もいないのです。

シメオンは「万民のために整えてくださった救い」と言い、さらに「異邦人を照らす啓示の光」と言いました。「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」という、その意味では純粋なユダヤ人のシメオンが、今、イエス様を抱きながら、これぞ異邦人、つまり、全世界に及ぶ神様の救いの光なのだ、と神様をほめ讃えているのです！なんとシメオンは、偏見にとらわれない、大きな広い心で、神様の救いというものを捉えていたことでしょうか！「聖霊が彼にとどまっていた」(2:25)というのは正にこういうことだったのではないのでしょうか。

これは、自戒をこめて言うのですけれども、私たちはともすると、自らの心の平安ばかりを求めてしまいがちだと思います。もちろん悪いことではありませんが、それだけだと視野が狭くなりますよね。私たち信仰者は放って置くと、自分だけを安全地帯において、知らない内に他者を裁く心がムクムクと湧き上がってくる場合があります。ファリサイ主義ですね。自己保身になってしまうのです。教会の「内」と「外」とか、自称「立派なクリスチャン」とそうでない者などと、線引きしてしまうことがあるように思います。しかし、それは傲慢な信仰ですよ。

イエス様は誰のために死んで下さったのでしょうか？ いっぱしの人間のような思いになって他者を裁き、神の子であるイエス様をさえ「神の子だったら十字架からおりて来い」と、せせら笑う私のため、私たち一人ひとりのためではないですか！

そこでは、イスラエルとか、アメリカとか日本とか、そんな枠組みは無くなっているのです！「主の十字架はわがためなり」と心の底から言える人が、他者に向かって確信を持って伝道できるのです。シメオンと一緒に言えるのです。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光です」と。

[3] じたばたしながら死んでゆける

シメオンは不思議な人だと思います。「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」(1:26)とお告げを受けていたと言うのです。でも考えてみてください。私たちに「これでもう死んでもいい」と言える時はどういう時であるのか。改めてそれを考える事へと、このシメオンの存在は私たちに問いを投げかけているように思います。

私はここを読んで、このシメオンは人類を代表しているのでは、と思いました。
「メシアに会うまでは決して死なない」を違う言い方をすれば、つまりシメオンの一生は、ただメシアと出会うためのものであったということでしょうか？ 私たちの 一生も、色々な事がありますけれども、ごく一行でいえば、「生まれた。イエスと出会った。死んだ」と言えるのであれば、それは比類なき幸いな人生ではないでしょうか？

昭和の作家で椎名麟三という人がいました。彼は、日本共産党の活動にも参加し、特高にも検挙されると言う経歴の後、様々な哲学書も読み耽り、一体自分は何者か？と問うようになりました。その中でドストエフスキーにも触れ、聖書の中のイエスという人にどうしても惹きつけられるものを感じ、やがてそのイエスの復活こそが自分の救いだ、と確信して、50才近くになって日本基督教団の教会で洗礼を受けました。

その時に彼はこのように語ったと言われています。「ああ、自分はこれで、安心して、“死にたくないよ〜”と、じたばたしながら死ぬことが出来る」と。これは素晴らしい言葉だと私は思いました。私たちは当然ですが、信仰者と言っても不完全です。努力で出来ることもあれば出来ないことも多いのです。死に直面して格好良く死んで行ける保障は全くありません。けれどもそれでいいのですね。

私が今年説教の中でもお話させて頂きましたように、たとえ水の上を歩いて溺れても「不信仰な者よ」と、私を抱きとめてくれるお方がいるのです。信仰の確かさはイエス様のみ腕にあるのです。

きっとシメオンは思っていたのではないのでしょうか。「今、私はイエス様を腕に抱いているけれども、本当は逆なのだ。このお方のみ腕の中でこそ、私は安らかに死んでゆけるのだ。そして、これからの時代の全ての人がその幸いを与えられるのだ」と。

[結] 既に主を与えられている幸いを生きる

私たちの人生は、いつも神の国への途上です。神様がイエス様の再臨によって 神の国を完成して下さるのが早いか、私たち自身の人生の終末が早いか分かりませんが、今私たちは、シメオンと共に、幼な子イエスを与えられたのです。

このお方が、今年もそうであったように、新しい年も、私たちの内に住んで人生を共に歩んで下さいます。途上であっても、既に主を与えられた喜びと、確かな望みを持って歩んでゆけるのは、本当に幸いなことです。来年もこの教会に連なる私たち一人ひとりを、神様が、その御わざに用いて下さいますように！

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様。この一年のあなたの憐れみと導きとを心から感謝致します。お二人の方が証しをして下さいましたけれども、私たち一人ひとりに、あなたが与えてくださった恵みがあり、それを振り返りながら、今み前に出ております。私たちの不信仰にも拘わらず、いつもそのみ腕で覆って下さる大きな あなたの慈しみがあったことを感謝します。新しい年も、あなたに信頼して歩む幸いを与えてください。主の御名によってお祈りいたします。アーメン